

『老老介護』に『認認介護』

介護保険の現状と課題

今年100歳を迎える大島
 リイさん（上野新）。足
 が不自由で押し車を使って生
 活していましたが、ちょうど
 一年前からほぼ寝たきりの状
 態が続いています。

現在は、息子夫婦（茂さん
 83歳、久美子さん77歳）と3
 人暮らし。リイさんの介護は
 茂さんと久美子さんが協力し
 ながら行っています。

リイさんの状態は要介護3
 程度で言うと中度に該当しま
 す。ベッドから食卓までは車
 いすで移動し、食事は自分で
 食べることができません。入浴
 も週に一度、村内施設を利用
 していますが、特に介護を要
 するのがトイレ。負担を掛け
 ないようと、数年前に寝室
 のベッド脇にトイレを設置し
 ました。しかし、今ではひと
 りでベッドから起き上がるこ

とが出来ず、トイレまでの約
 2分は茂さんの支えがなけれ
 ば用を足すこともできません。

毎晩、夜中に1〜2回はリ
 イさんからの呼び出しブザー
 が鳴ります。用事はもちろん
 トイレ。ブザー音で目を覚ま
 し、リイさんの部屋へ向かい
 ます。

まわりの『協力』があつて 成立する在宅介護

茂さんも久美子さんも世間
 一般でいう『高齢者』。

高齢者が高齢者を介護する、
 いわゆる「老老介護」は、村
 内では決して珍しくありません。
 茂さんと久美子さんには
 それぞれ役割分担があります。
 それは食事と身の回りの世話。
 茂さんは「とてもじゃないけ
 ど、両方を兼ねることはでき

ません。こうしてふたりで協
 力できているからこそ、介護
 できていると思います。また、
 近所にも親戚がいてほぼ毎日
 手伝いに来てくれるから助か
 りますよ」とまわりの協力で
 感謝していました。

『介護できる幸せ』

毎朝、茂さんには楽しみに
 している日課があります。

それは、リイさんとの会話。
 「今日はゆうあいに行く日
 か？」と聞くリイさんに「ち
 がうよ」「そうだよ」と応え
 る茂さん。平凡な会話ですが、
 “唯一の親子の会話”を楽し
 んでいると話す茂さんの笑顔
 が印象的でした。

取材の最後、茂さんはこう
 話しました。「世の中ってい
 うのは、親と自分と自分の子



大島リイさんの利用している介護サービス

| | |
|---------------------|-----|
| 通所介護（ゆうあい） | 週1回 |
| 訪問介護（ヘルパー） | 週2回 |
| 訪問看護 | 月2回 |
| 福祉用具貸与（ベッド・手すり・車いす） | |
| 居宅療養管理指導 | |

で構成されている。親が出来
 ないこと、出来なくなつたこ
 とは、自分や自分の子がやら
 なければいけない。だから、

親を介護することは当たり前
 のことだと思ひ、介護でき
 ることを幸せだと思ひます」

平成12年度にスタートした「介護保険制度」。昨今、
 高齢者が高齢者を介護する、いわゆる「老老介護」、
 また軽度の認知症の方が認知症の方を介護する「認認
 介護」が大きな課題となっています。
 今回は、サービス利用者や介護者、そして、地域で
 高齢者を見守る方などへの取材を通じて、村の介護保
 険の現状と課題を特集します。

高齢者を支える介護保険…しかし課題も山積み 「在宅」「施設」今後の取り組みは？



特別養護老人ホーム
垂水の里
鈴木克己 園長

緊急性の高い人たちを スムーズに入所につなげられるように

平成10年に開設した特別養護老人ホーム垂水の里。現在、重度の認知症や寝たきりの人など定員の50人が入所しています。

入所待ちとなっている人が200人を超えている状況に鈴木園長は「いつベッドが空くか分からない状況ですが、施設は大切な社会資源なので本当に緊急性の高い人からスムーズに入所につなげられるようにしていかなければ」と現状の課題についてふれました。

一人ひとりの生活を大切に

今後の進むべき方向として「施設に入所しても家族や地域とのつながりを持てること、そして、ここは生活の場なので、一人ひとりの生活を大切にしたい」と個別ケアの取り組みをポイントにあげました。



関川村社会福祉協議会
介護保険事業課長
佐々木 尚子
ケアマネージャー

認知症高齢者が年々増加 早期発見と早期治療が大切

年々、認知症を要因とする介護申請は増加傾向にあります。依頼を受ける段階で、認知症状が進んでいるケースも多く「認知症は早期発見と早期治療が大切。家族は“ボケた”という認識ではなく、病気になったという認識をもってもらいたい」と話す佐々木さん。

また、認知介護の現状については「認知症の高齢者が認知症の家族を介護するので対応方法への理解が乏しかったり、食事や服薬ができていなかったり、さまざまな問題がある」と指摘。地域の支えや見守りの必要性を訴えました。

地域包括ケアシステムの構築

今後の課題として、医療との連携・介護・予防・住まい・地域の見守りといった包括的な体制づくりをあげました。



**地域で支える介護保険
〜高齢者見守り訪問事業〜**
地域で増え続ける高齢者の一人暮らしや高齢者のみの世帯。そんな高齢者を地域で見守ろうと平成22年冬にスタートした「高齢者見守り訪問事業」では、各地区の民生委員が定期的な高齢者や体の不自由な方を訪問し、健康状態や困りごとがあるかどうかを確認。気になるケースを発見した場合、地域包括支援センターや村社会福祉協議会に連絡する仕組みとなっています。
民生委員の渡邊隆治さん（小和田）は、4地区で15件

ほど担当しています。特に冬場は雪が降るため、月に15回は訪問を実施。日常会話やあいさつを通して高齢者を見守っています。渡邊さんは「地域の中で高齢者を孤立させない取り組みが必要。村にも、高齢者の話し合い手になるようなボランティア組織があればいい」と話していました。

地域に溶け込む 取り組みを

「特に認知症患者に対して地域の理解があまりない。理解を深めてもらうためにも、なるべく地域に出ていきたい」と話すのは、平成19年に開設した小規模多機能型居宅介護「ハーティプラザ」管理者の熊倉司さん。地域の茶の間へ出掛けたり村内の高齢者施設へ出向きカラオケをしたり、人と人の交流を目的とした活動に取り組んでいます。

利用者の齋藤トシさん（蛇喰）は「いろいろな利用者に出会うのが楽しみです。歌をうたったり、にぎやかなことが好きなので外に出掛けるのは楽しくて仕方ありません。この場所ができて良かったです」と笑顔がこぼれていました。